

# たわやがトカラ情報

十島村教育委員会  
〒892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号  
TEL 099-227-9771

南北160km 「心をつなぎ気概に満ちた」十島の教育

## 11月…「おはら祭り・トカラふるさと会」 十島村教育長 有村 孝一

11月3日「オール十島村」でおはら祭りに参加しました。十島村では、本土復帰60周年を記念して参加したのが始まりです。今年で6回目になります。毎年各島からの参加者と役場職員が一緒になって踊っています。

おはら祭りは、昭和24年に鹿児島市市制60周年を記念して始まりました。南九州最大のお祭りとして発展してきています。「おはら節」にあわせて練り踊る「総踊り」を中心にいろいろな催しが繰り広げられます。当初は、鹿児島市の祭りだったので、今では県民の祭りとなっているようで、各市町村や学校のPTA、町内会、高校の同窓会などそれぞれの方々が参加して大いに盛り上げています。

十島村からは、70名の参加でした。みんなで一糸乱れぬ踊りを披露できました。TVカメラもその様子を撮っていたようです。ハンヤ節の時は、トカラの団扇を片手に「トカラ、トカラ。」の掛け声で、心一つにして踊りました。

限られた1時間30分ぐらいの時間でしたが、「十島村」のプラカードや「トカラ」の横断幕で十島村ここに在りということをアピールできたのではないかと思います。

まだまだ十島村の知名度は高くはないですが、こんな機会に、みんなんで存在感を示せたことは大変よかったと思います。

午後からは、トカラふるさと会が開催されました。今年で8回目になります。各島からはもちろんのこと、関東トカラ会など、県内外各地から約180名の皆さんが参加してくださいました。「トカラは一つ、想いは一つ」の合い言葉のもと、それぞれに旧交を温めていました。

私は、現在の学校の様子や、子どもたちのことについて多くの方々とお話しすることが出来て大変有



意義な会となりました。島を離れてから長い時間が経過していても、この会によりこれまでの空白がすぐ埋まってしまうというのは、大変素晴らしいことだと改めて思いました。子どもたちが、将来このように島のことを語り合う姿を重ねながら、今、子どもたちのためにできることは何かを再確認するいい機会となりました。

輝 入賞おめでとうございます！！

- ☆鹿児島県作文コンクール 入選
  - 森木洋那さん(悪小4年), 寺田碧海さん(宝小5年)
  - 西えほんさん(悪小6年), 久永太陽くん(悪中1年)
  - 山木力羅くん(誼中3年)
- ☆鹿児島県理科作品コンクール 入選
  - 沖園豪陽くん(誼小1年)「大みょうだけから、はたけをまもるぞ」
- ☆鹿児島県統計グラフコンクール 入選
  - 山中悠暉くん(誼小5年)「めざせ!松ごえホームラン」
  - 山中雪嘉さん(誼中2年)「STOP 少子高齢化」(学校賞) 誼訪瀬島小学校, 中学校
- ☆地域が育む「かごしまの教育」県民週間 標語の部 優秀賞 金森七海さん(誼小6年)
  - 「地域と学校 つながるつながる 県民週間」
- 特選 下川陽翔くん(小小5年)
  - 「手をあげて たくさん発表 県民週間」
- 特選 松下天哉くん(宝中2年)
  - 「学び舎と 地域をつなぐ 一週間」
- ☆鹿児島県環境美化コンクール 優良賞
  - 中之島小・中学校,
  - 誼訪之瀬島小・中学校
- ☆学校新聞コンクール
  - 2席 口之島小・中学校「タモトユリ」
  - 佳作 宝島小・中学校「メイメイ」



## 発 シリーズ 新聞に投稿 「ふん火から命を守るぞ」 誼訪之瀬島小学校 3年 日高涼風

火山がふん火したときに、何をしたらよいかについて学ぶひなん訓練がありました。学校だけではなく、

誼訪之瀬島の全員でひなんする訓練です。ぼくは、火山がばく発して、よう岩が流れてきたときを想ぞうして、びくびくしていました。消防団の人の話を聞くと、火山はふん火してほしくないと思ってきました。それから、火山から石が飛んできたときを考えて、飛行場あと地の下にあるトンネルにい動しました。トンネルは暗くて、ちょっとふるえましたが、ばく発してとんだ石からまもってくれると思うと、安心もしました。

港には、海上保安ちょうのじゅん視船が待っていました。フェリーとしまより少し小さい船でしたが、初めて見る船だったので、びっくりして、ドキドキしました。命は大切です。訓練を生かして、もしふん火したら、落ち着いてひなんしたいと思います。

## 灯 シリーズ—島で暮らす 私の宝物 小宝島小学校6年 有馬 凜

「あなたの宝物を教えてください。」と尋ねられると、私は「友だち」と応えるだろう。私は、小宝島に祖父母がいることもあり、小学校2年から山海留学生として小宝島小学校に通っている。今年で、小宝島の生活も4年目を迎えている。両親と離れて暮らしているが、兄妹と一緒に住んでいるため寂しくはない。

また、島に住む人たちが、いつでもどんなときにも声をかけてくださるので、会話がはずみ、心が温かくなる。そんな小宝島に住む人たちと小宝島が大好きだ。もちろん、悲しいときもある。それは、友だちが島を離れていくときだ。中学校を卒業して離れていく友だち。転校していく友だち。島から離れる人たちの別れは、とても寂しく、フェリーを見送るときは、いつまでも手を振っている。

今年度も島を旅立とうとしている友だちがいる。その友だちは、これまで悩み事を打ち明けることができた。係などで失敗したら助けてもらったりしてくれた。私にとっては、姉のような存在だ。誰に対しても優しく接することの大切さを教えてくれたその友だちにあこがれるようになり、出会いの大切さを知ることができた。

これからも、島から旅立つ友だちがいるかもしれないが、一人一人との出会いを大切にしていきたい。お互いに笑顔で楽しい思い出をつくるためには、友だちを大切にすることだと私は思う。だから、私の宝物は友だちなのだ。

## 十 島村の小・中学校からのメッセージ 宝島中学校 教諭 池亀敬泰

鹿児島県で教職員として採用されてから11年が経ち、念願だった離島勤務の機会をいただきました。



かねてから、少々の不便はあっても、小さい島、人口の少ない島で学校の存在意義を感じ、教職員としての勤めを果たしてみたいという思いがありました。宝島に降り立ってから、まだ8か月ほどしか過ぎていませんが、多くのことを感じ、多くのことを学ばせていただいています。そのうちのいくつかを記してみたいと思います。

皆さんの多くは国民的人気アニメ『サザエさん』をご存知だと思います。サザエさんの舞台は、高度経済成長期の都心郊外の住宅地だそうです。そこでタラちゃんは平気で1人で遊びに出かけます。この物騒な世の中、そんなのは今は昔、と思ってはいましたが、宝島では違います。転勤に伴い連れてきた自分の子どもたちも、気軽に外で遊んでは、「バナナもらったよ。」「お菓子もらったよ。」と言うのです。「お礼を言わなきゃ。どなたから?」と尋ねても、島に来てまだ日も浅いこともあり「わかんない。」と言うのです。島の子どもたちは、島中の大人たちに温かく見守られながら過ごしていることを強く感じます。

次に感じることは、助け合いの心や差し伸べられる親切、人と人の距離感が心地よい島の暮らしです。家庭用のガスボンベを自分で購入し、交換しなければなりません。初めてで分からず途方に暮れているとき、「いいよいいよ。やってあげるよ。」と当たり前のように助けてくれる方、電気店などないこの島で、笑顔でエアコンを取り付けてくださる方。帰宅するとドアノブに掛かっている採れたての野菜。助け合いの気持ちのことを「結の心」というのだと聞いたことがありましたが、宝島の方々はその言わずとも、まさに結の心を持っておられます。共に島で生きていく人々同士の信頼感に溢れています。

そして、何と言っても島全体が学校というものを大切にしてくださっていることです。全島民がPTA会員!初めは驚きましたが、学校の奉仕作業に島民の多くが来てくださいますし、入学式や運動会、文化祭にも多くの島民が来てくださいます。

また、学校で学ぶ子どもたちや学校で働く私たちにも島民の方々の温かい眼差しを感じます。宝島小・中学校で働くことの有り難さを感じるとともに、ここで一生懸命子どもたちのために尽くそうという気持ちが一層高まります。厳しくも豊かな自然、温かな人の優しさの中で、強くたくましい子どもたちを送り出せるよう、感謝の気持ちを忘れず、全力で頑張りたいと思っています。

「教職員仲間であるあなた」への  
私からのメッセージ

都会的なもの、現代的なものは確かに少ないかもしれませんが、しかし、その分、当たり前なことがとても素敵に感じられます。人が人として生きる原点を改めて意識させてくれ、同時に教員としての原点も再確認できる、十島はそんな場所だと思います。